

団長の心のものさし

悩める合唱愛好者
 どうして合唱活動を？
 本当に好きな合唱？

合唱は趣味の活動とはいえない!?

「趣味は何ですか？」と質問されることは多い。「合唱団に入っています」と答えるケースも多い。趣味の定義を論じるのは別にして、それが「好きなこと」に裏づけされていることは確かだろう。好きだから趣味としてやり続けていることに異論はないだろう。では「なぜ合唱団に入っているの？」と質問されて明確に回答できる人がどれだけいるだろう？僕も言葉には簡単にできない。あえてその必要もない。

個人活動での趣味は分かりやすい。団体の場合はややこしい。なぜなら個人の意思の段階では、それがたとえ趣味であっても大した問題にはならない。ところが団体の中で大勢のメンバーと「好き」を共有すること

は困難だ。なんとなく好きは有りだが…。おそらくほとんどの合唱団がこの部分に支配されているのだろう。みんなの総意が得られないから決められない。みんなが賛成してくれないから、やりたくてもやれない。

御用聞きとお得意様ではない

民意が重要なことは確かだ。だからといって総意を得られるために意見を迎合させていくと、気付かないうちに誰一人として満足していない結果を招いてしまうのである。引っ張っているリーダーまでもが。リーダーは御用聞きではない。メンバーはお得意様ではない。そのグループに関わるすべてのメンバーが、その

グループの活動を支える。それぞれが自分の出来ることを惜しみなく捧げることで成り立っている。

多くの価値観を受け入れることは容易

くない。だが、それが出来なければ団体活動は出来ない。あらゆる言語があるように、肌の色が様々なように、音楽に様々な表現があるように、そのグループにもあらゆるメンバーがいる。その数だけ価値観は存在する。



音楽表現にもその活動にもオペラ参加には複雑な価値観が絡み合う

かつてのうたおには異常に練習をしていた。臨時練習はほとんど定期的に行われていた。その当時は何の疑問も持っていなかった。だが今から20年ほど前、もっと大切なことを忘れてしていると気付いた。「意識力」が足りない。闇雲に練習し、その結果、コンクールで一定の成果を得ていたのだろうか。「歌えるという錯覚」とともに。これが物事を考える力を衰えさせていたように感じる。

技術力よりも意識の強さ

意識の弱い所には何も生まれない。僕は様々な問題を巻き起こしてきたと振り返る。オペラ参加やコラボがよい例だ。そのことでギクシャクしたこともある。だが、これらのプロジェクトには、リーダーとして譲れない思いが込められている。それはメンバー一人一人の「好き」に支配されない、うたおにの「命」を育むためのリーダーの意識力である。一時、痛めたり傷つく事もあるだろう。でもちきんと治療すれば以前よりも強くなる。

「好き」なことは一人で趣味としてやればよい。合唱は趣味ではなく文化活動であり社会活動だ。だから正々堂々と胸を張って飄々（ひょうひょう）と歌い続けたいものだ。それで当たり前といわれるまで。



ステージ数は意識力の強さの象徴

うたおにの4月15日(木)の様子

練習内容

桜の栞

今日もひとつ

「コタンの歌」より

船漕ぎ歌

熊の坐歌

ムックリの歌

臼搗き歌

パンペ・パンペのリムセ

カエルの子守歌

ついに「コタンの歌」全曲制覇！一応…。大体が嫌な人もいます。けれど、とりあえず全体像を掴むことは大事なことです。また、いきなり深入りし過ぎて拒絶反応を持っては元も子もない。それ以上に早い段階でそれなりに形にする力は、うたおにの優れたところだと思う。早くこなせばそれだけたくさんの歌に巡り会える。これ以上の幸せはないと思うね。